

西舎近藤町のにぎわい ―日高種馬牧場の建設

日高種畜牧場は旧名を「日高種馬牧場」（以後種馬牧場と略す）といい、明治四十年に設けられたものであった。“種馬”の文字が示すように、より良い種牡馬（しゅばば）を作り出す目的で準備された牧場で、これは日清、日露の両戦役、とくにロシアとの陸戦中、騎兵や砲の移動において、日本軍が著しく劣っていたという反省があったからである。欧米の列強はすでに乗用、荷役、その中間種と、用途に応じた改良を終えていた。兵員数の九割近くが陸軍であったことを考えると、これは軍事上緊急に改善しなければならないことだったし、したがって種馬牧場の歴史は、当初から昭和二十年の敗戦の日まで、日本の軍事の一翼を担うものであった。

種馬牧場は当時の浦河（現日高）支庁長西 忠義のほとんど独力といってよい努力の末に、ようやく設置が決まったものである。明治三十五年の支庁長就任当初から、農林省や宮内省の有力者への働きかけ、日高実業協会（「日高実業協会」の項参照）を組織しての誘致運動と、在勤中の彼の勤務日誌によれば、あらゆる機会をとらえて関係者との接触をはかる姿がうかがわれて、敬服せざるを得ない。ただ筆者などに理解できないのは、種馬牧場の設置がなぜ日高だったのかという点で、道南にも道央にも適地はまだたくさんあったと思われるからである。やはり西あつての日高種馬牧場であったのだろうか。

種馬牧場は現在こそ約二千五百町歩の面積だが、設立以来昭和二十五年までは一万町歩の面積があった。数字だけでは雲を掴むようだが、具体的には現在の上杵臼開拓地、シマン、向別の種別（タネベツ）から目名太（メナブト）にまたがる広大なエリアである。そこで昭和二十年までに二千三百余頭の生産を行い、候補種牡馬七七九頭、繁殖牝馬（はんしょくひんば）四七五頭を送り出したのだった。候補種牡馬とは、種馬としてその血統と形姿を残したい牡馬、繁殖牝馬とは子孫を残すべく選ばれた牝馬である。

明治政府のスローガンのひとつだった富国強兵策によって、軍馬の生産は当初から増産の方向にあったが、北海道はとりわけ畜産立国というお雇い外人教師の指導もあって、馬にしろ牛にしろ増産と改良が積極的に進められた。初期の開拓使も、後の北海道庁も、必要に応じて英米やフランス、オーストラリアなどから種牡馬を輸入して、在来馬の体質や体躯の改良をはかっていたが、戦争はこの動きに拍車をかけた。性質のおとなしい、力のある速い馬というのが軍馬の究極の目標だったが、その使途に応じて、おおよそ荷役馬、輓馬（ばんば）を十勝で、乗馬と軽輓馬を日高がそれぞれ中心になって生産するように計画された。以後中間種、軽種と呼ばれる馬種の王国として、日高が日本に君臨することになる礎が、このときに築かれたのである。

今日の牧場用地の中心となっている“段”又は“台”と呼ばれる一帯と、中央競馬会前の大草地は、明治の初期以来九州大村移民団や、赤心社を始めとする開拓者の鋤の入った土地であった。西舎高見線と呼ばれる立派な舗装道路の一帯から、オロマップキャンプ場にいたる道の周辺も、ハッタイと呼ばれて開拓の鋤の入った地域であった。

明治四年入植の大村移民団も、入植当時二十三戸あったものが、この頃にはほとんどバラバラになっていて、わずかに八軒ほどが西舎に残っていたに過ぎない。尾田忠兵衛（忠平）、山田要蔵、松本豊蔵、

藤田末五郎、池田鶴太郎、富岡清市、岡本仁五郎、桜井伝七などといった人びとがどうやらその残留組で、さらに現在では浦河町内全域に対象を広げても、その関係者が残っているのは、尾田、松本、池田、富岡、岡本の五戸だけではないかと思われる。

また明治十四年、第一次赤心社移民団は西舎橋から奥にかけて開墾を続けていた。この開拓は失敗とみなされたが、西舎入植の後に新たに荻伏へ移らずにこの開拓地に残った人びともいた。岡本総三郎、三島友助、尾田房吉、徳永利三郎、近藤宇吉、岡本玖七、岡本大助、川越九八郎、賀集太一、荒木樺平、曲戸増茂などである。この人たちと他の赤心社関係者が持株（「赤心社」の項参照）の交換分として、あるいはあらたに開拓地を購入して、農業を始める人びともいた。中島勇蔵、蛭崎清彦、仁木島恒吉、信岡賢治郎（栄蔵）などである。

またこれらの人びとは別に、個人的に伝手（つて）を頼って、開拓民としてこの地域に入植した家もあった。松田七兵衛、太田茂八、上田仁松、宮内年太郎などはそうした人びとだった。抜けている家もまだあると思うが、これらの人びとが種馬牧場入口周辺、西舎郵便局からT字路にかけて、中央競馬会施設の前後（ホロケナシ）、様似町宮孵（ふ）化場（ハツタイ）一帯に点在していた。これら一帯はすでにおおかたの樹木は伐採されていて、ポツンポツンと大木の伐根が残るだけだったという。これらの開拓農家は大小豆を中心として、稗、粟、ソバなどを作りながら営々として開墾を続けていたのである。この頃この地域でもようやく水稲づくりに手を染める者も出てきて、将来に少し希望が持てるようになっていた。そこへ降って湧いたように持ちあがったのが一万町歩の大種馬牧場を作るという話だった。

西 浦河支庁長や日高実業協会などの努力により、千葉県の下総御料牧場長の第一回検分が明治三十八年に、次いで三十九年には当時の日本馬産会の大御所、宮内省主馬頭藤波言忠（ことただ）の現地調査が行われ、種馬牧場の設置は本決まりとなった。藤波言忠は西舎の仁木島恒吉の家に泊まり、連日、鎌田九平を案内役として、馬で奥地まで踏渉して調査を行い、具体案を練ったという。しかも、町民は知らなかったものの、三十八年の農商務大臣との約束で、牧場用地一万町歩は町が無償提供するというようになっていた。

奥地の山林はまだしも、幌別川西岸一帯はすでに開拓の鋤が入っていて、大部分が民有地であった。牧場を開くためにはこの民有地をぜひとも手に入れなければならない。というのは、育成の中心となるのは段から川岸にかけてのこのあたり一帯となることは目にみえていたからである。

嫉視反目は世の常で、売り渡し交渉にあたった鎌田九平を始めとする実業協会の役員、村役たちは、国営牧場という名のもとに、飴とムチを使い分けながら交渉にあたった。強権的な明治政府の後楯があったとしても、血の滲むような努力を重ねて自ら開墾した土地を手離すことには、よほどの抵抗があったに違いない。売り渡し値段は当時の価格で一反当たり七円ほどであったという。浦河町はこの資金を政府系の金融機関から借り入れて用立てた。残りの土地は道有地からの保転である。

この話にはしかし後日譚がある。政府はこの土地を取得するかわりに、鶴川（むかわ）の土地をくれた。町はこれを民間に売り払い、金融機関への支払いを済ませただけでなく、その差益を日高実業協会へわたして、日高開発記念館の建設資金に充てたという。また西は手持ちの資産を処分して、牧場用地取得資金に充ててスッカランになったという。

立ち退きを余儀なくされた人びとは、周辺に土地を求めてひきつづき西舎に住み続けた人、杵臼や幌別に土地を求めたり小作に入ったりして移住した人、さらには十勝へ移住して行った人など、さまざまな人生が展開されていった。

さて無事に用地の取得を終えた日高種馬牧場は、初代の場長に農務省馬政局から水原勝之助を迎え、建設工事が始まった。そのありさまは古老たちの語り草になるほど大規模なものであった。この開墾をともなう土地改良工事は、青森県八戸の近藤元太郎の手によって行われた。元太郎は郷里から百人を超える大工や土工をひきつれて西舎に入り、何棟もの飯場を建てて牧場の建設にあたった。道を造り、橋を架け、木を伐り、井戸を掘った。製材工場を建て、建築用材も作った。それでも人はまだまだ足りなかった。地元の西舎だけではなく、杵臼からも幌別からも人が集められた。

これらの関係者が住んだのが、現在の西舎郵便局の一带で、ここから奥の大草地にかけては、人夫小屋が軒をつらね、旅館が建ち、店舗が並び、料亭が三軒、床屋が二軒もあったという。そのにぎわいぶりは今では想像もできないが、八月七日から始まった盆踊りは、白浜商店の前あたりで行われたが、二十日盆まで欠ける日もなく寄せる人波でごった返していたという。それで誰言うとなく、このあたり一帯を“近藤町”と呼ぶようになったが、今はそれを偲ぶよすがとして、わずかに“近藤橋”という名のついた、小さな橋が残っているきりである。

さしもの大工事も大正五年にはほぼ終了し、事務所、工場、倉庫、厩舎、宿舎、研究施設など百数十棟の建て物群が出現した。勇名を馳せた独身寮“ギドラン倶楽部”などもその中にあった。百人以上もの労務者がここで働き、その家族が住んだ。上級管理職はおおよそ本省からやって来たエリート公務員で、帝大出の技術者ばかりだった。かれらは女中部屋つきの一戸建てに住み、高給を得ていた。盛岡高等農林を始めとする農業学校出身者が中間管理職となり、実務の第一線に立った。昭和の初めの話になるが、日高で一番高給を貰っているのが種馬牧場の場長で、月給二百円といわれた。次が浦河支庁長で百六十円、浦河町長が百三十円、種馬牧場課長が百二十円、同係長級が七、八十円、同労務者で三十円前後だったという。これらの新来の住人が増えたお蔭で、近藤町界隈の商店は商売をつづけることができたし、百姓たちも牧場に収めるために、燕麦（えんばく）の作付けを増やしたり、片手間につくったソバ粉を売りに行ったりした。また農閑期には牧場のデメン仕事に出たりして、現金収入を得ることもできた。

しかしおおかたの西舎の住人にとっては、種馬牧場はなんとなく煙たい存在で、立ち入りがるさく制限されることがあったり、上級職員に軍人が多かたり、見たこともない豪華な漆塗りの二頭立て馬車がカラカラと音を立てて出入りするなど、近づきになりたくない異質なものがあったという。西舎在住の年寄りのなかには、戦前一度も種馬牧場に入ったことがないという住人もいる。

このようななかで、種馬牧場は本来の業務を開始する。“よりよい種牡馬を作り出すこと”というのが設立目的だったことから、多くは外国からの輸入種馬が導入される。牧場建設の始まった翌四十一年春に、種牡馬としてサラブレッドのブレイアモーア（英）、ギドラン第四一ノ三（豪）など八頭、牝馬二頭、同年秋にはアングロノルマンのファイランカール（仏）などの四頭、牝馬七十八頭など矢継早に導入され、着々と体制を整えてゆく。いい種牡馬にいい繁殖牝馬を交配していい種牡馬を得て、さらにこれをいい繁殖牝馬と交配して望むべき姿と資質を備えた種牡馬に近づけてゆく、というのが種馬牧場の目標と方法であった。

国営の幾つかの牧場だけでは、軍が必要とする馬の一割も集められない。そこで種馬牧場が持っている生産馬のうち、牝馬数頭だけを残して、あとは民間に払い下げてゆく。また毎年、生産馬の何割かを全国の種馬所に種牡馬として派遣、又は民間に貸し付ける。この種牡馬が民間の牝馬と交配して、全体として血統も容姿も次第に整えられた馬が生産されることになる。軍はこれら民間の生産馬から、用途に応じた良馬を購入して、必要量をまかなうというやり方だった。

日高地方が軽種馬生産に他の地域より先じていたのは、日高の育馬の歴史、気候風土の環境だけでなく、種馬牧場が乗用、軽輓馬の改良を目的としていたその余恵によるということはすでに書いた。このため種馬牧場にはサラブレッド、アングロアラブ、ギドラン、トロッター、そしてハクニー、ノーニウス、アングロノルマンなどの軽種、中間種が新冠御料牧場や下総御料牧場などから集められ、明治末期で種牡馬二十一頭、繁殖馬百六頭がすでに導入されて活躍していた。日高以外の地域が、派遣された種牡馬を利用する以外に改良の方法がなかったのに対し、浦河周辺の地域は、種馬牧場係養の種牡馬の種付けを受けることもできたし、最新の飼育管理の技術をいち早く手にすることができたことが、軽種馬産王国“日高”を作ったのであろう。

別な意味で、軍需物資のひとつに数えられた日高馬の歴史は、昭和二十年の終戦の日までつづいたが、その後は産業用馬の原原種馬づくり、競馬用の軽種の種牡馬づくり、さらにはコリデール種の緬羊の増殖などの時代を経て、昭和四十年代に入っては、これらをすべて取りやめ、乳牛の改良だけをその任務とするようになった。名称も昭和二十一年には呼び慣れた種馬牧場から「日高種畜牧場」に変更され、さらに平成二年には「農林省家畜改良センター日高牧場」と変更された。そして数年後には、春別の分厩を残し、すべての施設と用地は日本中央競馬会が、調教センターとして再び馬の活躍する地域に再出発させることとなっている。

[文責 高田]

【話者】

伊藤 三郎	浦河町西舎	農林省官舎	明治四十二年生まれ
磯野 始	浦河町幌別		明治三十九年生まれ
松本 忠雄	浦河町西舎		明治四十二年生まれ
白浜 梅生	浦河町西舎		大正十二年生まれ
鈴木 善一	浦河町堺町東		大正七年生まれ
信岡 弘	浦河町杵臼		明治三十七年生まれ
近藤 泉（たかし）	浦河町西舎		大正十一年生まれ

【参考】

西 忠義翁徳行録	昭和八年	日高実業協会
牧場五十年のあゆみ	昭和三十二年	日高種畜牧場
清風和流	塩出宇吉手稿	